



# アフリカ帰還への待望 : ジャマイカのラスタファリアンの夢と現実についてのスケッチ

長嶋, 佳子  
柴田, 佳子

---

**(Citation)**

大阪学院大学人文自然論叢, 18:71-84

**(Issue Date)**

1988-12

**(Resource Type)**

departmental bulletin paper

**(Version)**

Version of Record

**(URL)**

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90001731>



# アフリカ帰還への待望

—ジャマイカのラスタファリアンの夢と現実についてのスケッチ—

長 嶋 佳 子

Waiting for “Repatriation to Africa”

—A Sketch of Jamaican Rastafarians’ Dreams and Realities—

Nagashima Yoshiko

—昨年（1987年）はマーカス・ガーヴェイ（Marcus M. Garvey, 1887—1940）の生誕100年目を迎えた。故国ジャマイカでは、最初の国家的英雄の冠を与えられた者の一人であるガーヴェイとその業績について、シンポジウムをはじめ様々な行事をもって回顧と再検討が行なわれ、華々しい祭典的雰囲気の中で彼の偉業が称賛された。またニューヨークを中心に、黒人パワーが強い海外の諸都市でも、記念行事が多数催された。<sup>1)</sup>

日本ではガーヴェイに関する研究はあまり進められていず、知名度も概して高くはない。本小論はガーヴェイとその業績を中心に取り上げるものではないが、彼の思想と運動の中核でもあった「アフリカ帰還」(Back-to-Africa, Repatriation) について、脇より光を当てることにより、この時期にささやかな貢献となることを願っている。ここではこの思想と運動の重要な一継承者と考えられているラスタファリ運動 (Rastafarian Movement) に焦点を当て、運動の展開にも大きな影響を与えてきたその「夢」と現実について論述することにしよう。ジャマイカのラスタファリ運動あるいはラスタファリアンに関しては、筆者が1978年10月～80年7月に同国で調査研究した時に集めた資料に主に基づいている。<sup>2)</sup>

- 
- 1) ジャマイカの大新聞グリーナー紙の海外北米版 (*The Weekly Gleaner, N.A.*) から、ジャマイカ内外のそういった活発な動きを見てとることができた。
  - 2) 1978年10月～79年6月は文部省国際交流制度派遣留学生として、西インド大学モナ校に留学し、同運動に関する調査は78年12月より開始した。なお調査研究の成果の一部は、81年1月に提出した修士論文以来、論文や口頭発表などで多数発表している。今回は、今まで詳しく扱っていなかった側面を再考した。拙稿については末尾の文献を参照されたい。なお比較のための東カリブ地域での短期調査は、1985年夏に東京大学大学院生奨励研究費の助成を受けて行なった。

## I. ラスタファリ運動とガーヴェイ

万華鏡のような側面を持ち、多様な定義を可能ならしめるラスタファリ運動は、1930年、ジャマイカの首都キングストンのスラムで生まれ、主に黒人下層階級の間を広まった新宗教・文化運動である。ユダヤ・キリスト教的伝統に則りながらも、それを黒人性を前面に押し出して再解釈し、時にブラック・シオニスト的である。千年王国的 (millenarian) かつ土着主義的 (nativistic) 思想も濃厚に展開され、時代錯誤的と言われながらも、これらの要素は消滅するどころか、多く歴史的に展開されてきた。またその多面的「異端性」のため多大な迫害を被りながらも、彼らは人数の上でも、また性差、人種・民族差、階層差や国境を越えて拡大しつつある。長く疎外されてきたが、様々な独自の文化的表現も開花させ、ジャマイカでは下位文化としての位置さえ得ている。同運動の源流は一つではないが、ガーヴェイズムはその一大脈流となっている。

ところで、祖国での状況に落胆したガーヴェイは、1916年に合衆国へ出国する際、次のような「預言」を残したとされている。

「見よ、アフリカを。黒人の王が王冠を戴く。彼こそが贖い主になるであろう。解放の日は近づいている。」

ガーヴェイは、ニューヨークを中心に大成功を収めるが、詐欺等の疑いで国外追放され、1927年に帰国する。ところが「黒いモーセ」は、「預言者は自分の郷里では歓迎されない<sup>3)</sup>」とあるように不評を買い、失意のうちに翌年英国へ渡る。しかしあの預言は深くジャマイカ人の間に沈潜し、30年にエチオピアのラス・タファリ皇子 (Ras Tafari Makonen) がハイレ・セラシエ I 世 (Haile Selassie I) として戴冠したニュースが伝わると、彼こそ黒人の贖い主と噂されていったのである。

まもなく「預言の成就」の信憑性を見究める注意深い検証作業が、少なからぬ人々の手で個別になされ始め、その最も確実な参照源は聖書に求められた。(それはジャマイカのキリスト教の伝統の厚味を物語っている。)やがて数人が各独立にそう確信するに至り、別個に説き明かし、そのメッセージはスラムを中心に拡がる。彼らはラス・タファリ崇拝者と見做され、ラスタファリアン (Rastafarian) と呼ばれるようになる。説教師を核とした集合体が形成されたが、各グループは個性があり、その信仰内容も未統一ではあった。

彼らを対象とした1953年の調査と60年のものを比べると、アフリカ帰還について二つの重要な点を指摘できる。第一は、当初から明確にその夢、または願望思想が強く表われていたこと、第二に、60年には神/ハイレ・セラシエがその実現化を手配してくれるという特記がないことである。ただ帰還という形態によってはじめて贖われうるのだという信念が語られ、その実現化への方策、責任の所在について、運動としての共通項は抽出されて

3) 新約聖書マタイ13:57、マルコ6:4、ルカ4:24、ヨハネ4:44。

いない。後者については、多数の小グループ形成により運動が展開され、重要な懸案事項についてさえも一致を見ることが不可能な程、その信条や意見が多様に存在したからだと考えられる。

ところでこのアフリカ帰還思想及び運動は、前述のとおり、ガーヴェイの影響を最も強く受け、それを別の形で継承したものと見做して差しつかえない。彼は1914年にキングストンで設立したUNIA(万国黒人地位改善協会、Universal Negro Improvement Association)の支部を合衆国でも設立し、1920年以降、「偉大なアフリカ大陸に自由の旗を打ち立てるために」、4億の世界中の黒人を念頭に置いて様々なメッセージを語り始める。黒人の人種的誇りを活性化し、アフリカの過去を称賛し、「アフリカ人にアフリカを」と説き、帰還への夢を訴え続けたのである。その実現のための具体策の一つであった黒星汽船(Black Star Line)会社は、結局倒産するが、彼自身の「アフリカ臨時大統領」任命等も含め、一連の出来事は帰還願望熱の爆発的高揚を如実に表わしていた。その華々しい活躍ぶりはジャマイカにもある程度伝わり、語り継がれた。その「記憶」は特にラスタファリアン(以下ラスタと略す)の間で再活性化されてきたが、不必要で不利な情報・知識やイメージは

4) Simpson (1955)。彼は以下の点をまとめている。

- (1)黒人は、古代イスラエル人の生まれ変わり(reincarnations)であり、彼らの罪(transgressions)のため西インド諸島に追放(exiled)された。
- (2)ハイレ・セラシエは生ける神であり、世界の皇帝(Emperor of the World)である。
- (3)エチオピアは天国である。ジャマイカの状況は希望なき地獄である。
- (4)黒人は白人より優れている。
- (5)まもなく黒人は、白人が過去に黒人になしてきた暴虐(atrocities)のために白人に復讐し、黒人に白人が仕えるよう強制するであろう。
- (6)黒人の神であり皇帝であられる方は、黒人が故郷(home)に帰れるように、まもなく手配して(arrange)くれるであろう。

なお、運動当初よりの提唱者/指導者の一人レオナード・ハウエル(Leonard P. Howell)は、以下の点を提議し主張していたことが知られている。彼はまたジャマイカにおける「ラス・タファリの代理人」と見做されていたと報告されている。

- (1)白人への憎悪
- (2)黒人の完全なる優越性
- (3)白人の邪悪さ(wickedness)への復讐
- (4)ジャマイカ政府と法的団体への拒否、迫害及び侮辱
- (5)アフリカ帰還への準備
- (6)ハイレ・セラシエ皇帝の至高的存在(the Supreme Being)及び黒人の唯一の支配者としての承認

以上についてはBarrett (1977: 85)。

5) Smith *et al.* (1960)。彼らは以下のようにまとめている。

- (1)ラス・タファリは生ける神である。
- (2)エチオピアは黒人の故郷である。
- (3)アフリカ帰還(Repatriation)は黒人にとっての贖い(redemption)の方策である。それは預言され foretold)、まもなく起こるであろう。
- (4)白人のやり方は悪であり、特に黒人に対してはそうである。

消さないし忘却され、必要で有益なものは、現在に生きた想像力の源として定着している。

ところで、ラスト以外のディアスポラ (diaspora) 黒人の間ではもとより、ラストの間でさえも、ガーヴェイや彼のアフリカ帰還に対しては多様な見解が渦巻いてきた。例えば彼を偉大な預言者と見る人はきわめて多い。エリヤやバプテスマのヨハネなど聖書中の重要人物の流れの中に位置づけ、彼らの生まれ変わり (reincarnation) と説明したり、中には半ば神格化さえする人々もいる。彼らはほぼ全面的にガーヴェイの人格、言動や業績を非常に高く評価してきた。ところが一方で彼を偉大な黒人指導者と認めつつも、全面的に受け入れることはしない人もまた多い。例えば黒人大衆に誤った方向づけをした一詐欺師、大言壮語の大ほら吹き、時代錯誤の幻想家、権威主義好み等のレッテルが彼に貼られてきた。またセラシエ帝こそがキリストの再来であるのに、ガーヴェイはそれを積極的に認めなかった、あるいは否認したとして、直接ガーヴェイ支持者 (Garveyite) と呼ばれることさえ拒否する人も少なくない。

無論、ラストにはならず「忠実な」ガーヴェイ支持者として、UNIA 及び EWF (Ethiopian World Federation エチオピア世界連盟<sup>6)</sup>) の支部を通じて、諸活動を行なっている人はいる。これらの団体に属するか、様々なレベルの関係を持っているラストも決して少なくなかった。彼らの中で彼を消極的に、ないし否定的に見る人は、主にその政治的指導性や経済・経営的手腕の欠如、及びそれらに由来する事業の失敗 (黒星汽船事件等) を取り上げる。だが彼のそもそものアフリカについての認識や知識が、質量共に豊富で「正しい」ものではなかった点も指摘される。

例えば彼はアフリカに一度も足を踏み入れていない。現実の姿には疎いまま、主に書物に依拠しながら、アフリカの「偉大な過去」の栄光と繁栄を強調した。そのアフリカ観は、過度に理想化された高文明への誇りと夢に裏打ちされていたと言える。それは彼のユートピア化されたアフリカ像を刻印づけされた新世界の黒人にとって、不当に抑圧され劣等視された状態からの自己解放を少しでも可能ならしめた。なぜならば、威厳に満ちた人種的誇りは高揚され、アフリカ文化の復権の徴候を見る一助となったからである。しかしながらこのような教育的効果はあったものの、アフリカ即ちユートピアという夢が拡大して与え続けられたため、現状を直視し、正当に評価する努力を歪めてしまった、と批判されてきたことも事実である。ともあれ、彼に聖性を付与し、宗教的情熱をもって崇める立場から、その社会・文化的貢献を称賛し、宗教性は持たせない立場まで含め、彼を偉大な英雄として重要視する見解の方が一般的である。

---

6) 1937年にニューヨークで設立され、イタリア植民地主義に対抗するエチオピアへの援助や親善を要求したロビー団体。

## II. 奴隷制時代からのアフリカ帰還思想と実現化の試み

ガーヴェイのアフリカ帰還思想は、全ディアスポラ黒人を対象とし、理想化されたアフリカへの当然の凱旋的帰郷という特殊な意味を帯びたイデオロギーである。しかし、ガーヴェイズムがこのような形で提示され普及したのが今世紀初頭だったからと言って、アフリカへの帰郷願望と実現化の試みがそれ以前になかったのでは決してない。アフリカ黒人が奴隷として大西洋を渡り始めた時から、実は始まっていたのである。それは鎖に繋がれた状態からの慣れ親しんだ故郷への、そして自由への激しい渴望の表現であった。強制的に奴隷という状態で連行された人々が帰郷願望を抱くのは、ごく自然のことである。無論全ての奴隷が同様の気持ちを抱き、考えを持ち、行動に移したわけではないが、ある程度の民族文化的特徴を見ることはできた。

例えばイボ族 (Ibo) の奴隷は他民族に比べて自殺率が高かったが、それは死後ギニアに帰れるという宗教思想があったからでもある。つまり死による肉体的解放とスピリットの帰還実現が結びつけられていたのである。彼らに限らず、西アフリカ諸民族文化の中には、故郷への強い郷愁を祖先に関する儀礼や歌などの中で言い表わし、後世に伝えてきたものが残っている。ジャマイカで最も強くその思想が見られるのは、東部のポートランド (Portland)、セント・トマス (St. Thomas) などの行政教区で継承されてきたクミナ (Kumina) と呼ばれる宗教儀礼である。その儀礼歌の中の歌詞には、「私たちの故郷、国へ飛んで帰る」という表現も出てくる。この場合、彼らのアイデンティティは「コンゴ人」としてあり、それゆえ、アフリカへ、コンゴへ、祖先の生まれ故郷へ帰りたい、いやスピリットは帰るものなのだ、という思想が見られるのである。

クミナのように宗教文化変容の度合が他に比べて大きくない民族宗教文化は、故郷での祖先崇拝や死生観、身体を含む宇宙観を基盤として、苛酷な奴隷制社会をくぐり抜けてきたと言える。その儀礼コスモスの中では、断片的にせよ、彼らはいわば引き離されたアフリカ人、そして個別の民族としてのアイデンティティを表出してきた。世代を経て、実際の故郷の情報や知識を得られず、また故郷喪失観さえ味わわざるをえなくとも、口頭伝承や共同の身体記憶に組み込まれた自由の地「アフリカ」は、常に心の拠り所となり、必ずや帰るべき場所として参照され、求められてきたのである。

一方、アフリカの民族宗教文化伝統は、一般に多くの変容を示してきた。なかでもキリスト教、特にジャマイカへは18世紀後半以降、欧米から宣教師を送ったプロテスタントの諸教派の影響が強く、先に移入されたローマ・カトリック教会のあり方と働きかけも若干作用し、アフリカ系宗教とシンクレティズムを起こしている。全面的にキリスト教を受容した場合はなおさら、多少なりともその影響を受けたアフロ・カリビアン・カルトの諸事例でも、黒人の多くは、聖書で何度も言及され、特別の意味と象徴を付与された「エチオピア」に格別の思い入れを伴って、自らと同一視してきた。「エチオピア」や「クシュ」は即

ち「アフリカ」と言い換えられ、きわめて意味深長な象徴的言葉となった。エチオピアはハイレ・セラシエ I 世がクーデターで廃位（1974年）されるまで、「ソロモン王とシェバの女王の国」として、旧約聖書時代より連綿と続いた「誇るべき黒人王国」である。キリスト教はパレスチナの青年フルメンティウス（Frumentius）によって4世紀初頭に伝えられたとされ、公式にはエチオピア教会は、332年が創設の年である。そして過去の歴史や伝統から断たれ、異郷の地で隷属状態を長期にわたって強いられ、また支配者側がもたらしたキリスト教を部分的に受容したディアスポラ黒人にとって、神の民の国エチオピアは自らの王国として解釈されていく。黒人の土着教会や独立教会他、非宗教的団体名にも、エチオピアやアビシニアの名を冠するものが多いのも、彼らの同一化傾向をよく表わしていると言える。

彼らは特に出エジプト（Exodus）の記事を自らの民族的歴史と同一化した。と同時に未だ解放されていない民に対するメシアへの待望も強かった。故郷イスラエルはエチオピア／アフリカと換言され、モーセに匹敵する偉大な預言者／指導者による帰還願望と結びつけられた。そして解放者／メシア待望は、さらに再来王キリスト待臨思想と混合する。王としてのメシアがアフリカ／エチオピアより出現し、新大陸の異郷の地、隷属状態より救済／解放し、「故郷」アフリカ／エチオピアへ帰してくれると受け取られたのである。これらのプロセスの中では、「事実」や多くの歴史的「知識」よりも、信仰とそれによる確信、歴史的想像力が重要な働きをなしたと言えよう。彼らは客観的事実の主観的解釈、主観性の客観化、「知」の枠組の時と場に応じての拡大縮小による自己正当化といった作業を複雑に繰返しつつ、新たなリアリティ形成を続けてきた。それにより、アフリカは郷愁を誘うユートピアであると共に、その築き上げた一種宗教的リアリティとして認識されたのである。そしていかなる手段、形態にしろその帰還願望は保たれてきたが、その実現化は「エクソダス」の場合とは程遠いものだった。

黒人のアフリカ行きに関しては、アメリカからリベリアへの移住が最も有名であろうが、西インド諸島からも幾つか例がある。例えばジャマイカの500人以上のマルーン（maroon 逃亡奴隷）が、自由人としてカナダのハリファックス経由でシエラ・レオネへ渡ったのをはじめ、合衆国ないしカナダにまず行って西アフリカを目指す流れがあった。また後代にわたり、主に西アフリカへ戻った西インド黒人のなかで特筆すべきなのは、キリスト教宣教師、教師、手工芸技能者、鉄道建設者、第一次大戦時の兵士などの資格者ないし職業人である。ヨーロッパのカリブ海進出と植民地化は、彼らにアフリカ人よりも早く西洋文明の感化を深く及ぼしていた。彼らはこれらの分野で未開拓ないし後進的だった西アフリカへ移住し、知識や技術の供与に貢献したのである。白人によるヨーロッパからの移入に比べて、何よりも黒人同胞という親和性のために、それらのアフリカでの受容度と理解度は総じて高かったと評価されてきた。彼らの献身に対するアフリカ側からの感謝は様々に表わされている。

ところで、ラスタの動向を見る前に、同運動の源流の一つを形成したと考えられるベドワーディズムについても、一言触れねばならない。なぜならここにも別の形のエチオピアニズムが表現されていたからである。ガーヴェイより少し前だがほぼ同時代人と言ってもよいアレクサンダー・ベドワード (Alexander Bedward 1859?—1930) は、独立教会の「ジャマイカ土着バプテスト自由教会」の牧師 (最初は長老) として、主に信仰による治癒能力により、多くの信者をジャマイカ「全土から」集めた程の人物であった。彼のエチオピアとの同一化は明らかであり、その有名な預言の一つは、「エチオピア/クシュはその手を神に向かって急いで差し伸ばす」という、旧約聖書の詩篇68篇31節の引用に基づいていた。そして「白い壁と黒い壁があるが、これまでは白い壁が黒い壁を取り囲んできた。しかし今や黒い方が白い方よりも大きくなったのである……」と、抑圧されてきた黒人パワーの爆発を間近に感じさせる脅威的なメッセージを説いていく。そして20年代に、全島を震撼させた植民地主義への抵抗運動を、キングストン市内での「<sup>ホワイト・マーチ</sup>白い行進」等を通じて行なうのである。彼らの多くはエチオピアを真の故郷と見做してはいたが、それは地上のエチオピアではなかった。むしろエチオピアはスピリチュアルな故郷であり、地上より離脱した世界、「天国」(heaven) であった。ベドワーディズムには帰還を移住という形で実現化する試みは見られなかった。

ガーヴェイズムはアフリカ帰還の夢を与えつつ、移住という形態の是非、適宜にかかわらず、その実現のための実際の知識や能力の重要性について、具体的な試みや困難ないし挫折を通して後世に伝えることになった。また旧世界と新世界の間に生まれた黒人の連帯感やパン・アフリカニズムへの貢献も大きい。一方ベドワーディズムは、帰還の実現化を具体的に目指すよりは、社会内での黒人と白人の地位や関係の完全な逆転などにより、ガーヴェイズムに比べるとそのヴィジョンの規模は小さかったにせよ、社会内の「エチオピア」化の夢を与えたと考えられる。つまり聖書の神の権威による黒人主権と支配の樹立への夢である。ガーヴェイズムもベドワーディズムも、アフリカ/エチオピア帰還熱を煽りながらも、結局はその夢の希求を幾分断念させ、居住社会へより深く関わる方向づけを導いたと言えよう。大方のアフリカ/エチオピア=ユートピアの図式は徐々に崩れ、帰還の時期、目的地、方法等は軌道修正されていく。しかし宗教的情熱は消え去ったのではなく、ラスタファリ運動として再燃するのである。

### III. ラスタファリアンの帰還の夢と挫折

運動初期、キングストンのスラム近辺では、エチオピアニズムを背景とした個人やグループの間で、ガーヴェイの預言の成就熱は沸いていた。エチオピアからの神聖王/メシアの登場で、神の居住地、アフリカ/エチオピアへの帰還願望は高かったと見られる。彼らはこれをめぐって世間を騒がすようになるが、50年代に入るとその規模は大きくなってい

くのである。ここでは三つの出来事を取り上げよう。一つは先述のEWFが1936年に設立したジャマイカ支部を通じて、セラシエ帝自らが、エチオピア領土内に500haの土地を供与したというニュースが伝達されたこと。第二に、1958年に西キングストンの悪名高きスラムで、プリンス・エドワード・エマニュエル (Prince Edward Emanuel) と呼ばれる指導者のもとに、様々なグループの境<sup>バウンダリー</sup>界を越えた大集会が開かれたが、そこでアフリカ帰還の諸準備が第一義的目的とされたこと。第三に、翌59年に別の指導者、クローディアス・ヘンリー (Rev. Claudius Henry) が、彼の設立した「アフリカ改革教会」(African Reformed Church) を拠点に、アフリカへの「パスポート」と称するカードを何千枚も配布し、定められた日に大挙してエクソダスを実現しようとしたが、それも失敗したことである。

第一点については、生ける神より「天国」に土地を確保してもらったということで、ラストはいよいよエチオピア行き近しと奮い立った。ところが先方の求める人材は、国家建設に直接貢献可能な技術労働者層であった。アディス・アベバからの「王室商船」“royal merchant ship”の到来を待ちわびていた多くの未熟練労働者や失業者には、必ずしも朗報とはならなかった。ただこの一連の動きはかなり具体性を帯びていたため、また折しも英本国への大量移民の時期と重なり、エチオピア帰還熱は容易に醒めなかった。現在に至るまで、このEWFが中心となり、エチオピア移住を小規模ながら実現している人々もいる。総じて約束事、責任の所在、資金の出所、具体的出入国方法、現地での生活方法、帰国者のその後の生活の保障などの諸問題をめぐり、いくつもの噂を多く含んだ情報が流され続けた。この当時の熱狂と幻想、期待と希望は、具体的作業に入っていく程、失望や落胆を深めていったというのが実情である。また次善策の考案をはじめ、軌道修正の様々な副産物も生じた。ユートピアの挫折と否定から、ユートピアの非ユートピア化の流れはその一つでもある。そこにさえ、個人的変化から集団的分化レベルでの変化に至るまで、多様なタイプを見ることができる。

第二のラストの統合された大集会<sup>7)</sup>“Universal Convention”は、「ナイヤビンギ」“Nyabyngi” (Nyabyngi, Niabingi) と呼ばれる彼ら独自の儀礼的集会で、讃美、太鼓叩き、踊り、説教などの主要要素で構成されている。この時の最大の目的はアフリカ帰還の準備にあったが、それについての統一見解を得ることは不可能だった。その後このテーマを主要目的とする、グループの境界を越えての大ナイヤビンギは開かれなくなった。結局それ以降は個別グループ毎に旗色を鮮明にし、帰還についても内部での意見調整と統一をはかる動きが強まったと言える。このときの指導者、プリンス・エマニュエルのグループ<sup>8)</sup>(EIC) は、かなり忠実にガーヴェイズムを継承している。

7) 綴り方は一定していない。その他にも“Nya bingi”などが見られる。また呼称も [naija]、[bingi] と略されて用いられることが多い。

8) このグループは頻繁に名称を変えてきた。筆者の調査当時は一般に Ethiopian International Congress、そして通称“Bobo”として知られていた。

「エチオピア国際会議」(Ethiopian International Congress、以下EICと略す)は、キングストン東部のブル・ベイ(Bull Bay)という小さな町の丘の上にコミュニオンを形成し、近い将来、海の彼方からアフリカへ帰らせてくれる黒星汽船が現われると信じてきた。丘の南には海が広がり、彼らはその向こうにアフリカ大陸があると教えられている。アフリカは実際、東の方角にあるはずだが、東も西も北も山(丘)ではさまれているため、実質的に視覚的に開けている南方に目を向けてきたのであろう。奴隷制時代はこの山こそが安全、解放、自由を保証する場で、山/森林地帯はマルーンのコミュニティの形成の場となってきた。それゆえ丘、山、森林は自由、救済の象徴となってきたのである。しかしながらEICのコミュニオンのメンバーにとっては、彼らが不法占拠者(squatter)として、ごつごつした岩場の少なくないこの丘の上にしか、「国家の中の国家」を建設しえなかったという不利益も手伝って、これら丘/山は実質的閉塞状況を示していたと言える。確かに以前頻繁だった警察、軍隊などの摘発、襲撃、暴力からは守られ、内部政治や社会生活への過干渉は減少したが、この丘/山は完全な自由、解放、救済の象徴とは言い難かった。その点、眼下に広がる果てしない海は遠大な希望や期待感、そして夢を与えてくれるものである。彼地にアフリカがある、いつかそこから黒星汽船が救いに来てくれ、アフリカへ帰れる…と。

ここに認められる海一船—アフリカという連想で結びつけられる救済観の存在は重要である。これは奴隷制時代よりの現実的な救済観の一つであった。そしてそれはアフリカより船で海を渡って連行されたのだから、同様に船で帰(され)るべき、帰りたい、帰して欲しいという単純だが根強い願望が、現在に至るまで一部の黒人の心性の中に持続していることと関連がある。興味深いことに、先述の祖先崇拜儀礼クミナの現代における忠実な継承者(特に「クミナ女王」<sup>クミン</sup>)にも、同様の観念が認められた。だが、より直接的には、ガーヴェイズムの強い影響によると考えられる。EICのコミュニオン内の儀礼所(「聖なる幕屋」“Holy Tabernacle”)や別棟の備品置き場には、所狭しとガーヴェイの肖像画や写真、ガーヴェイ派の黒、赤、緑の旗や海に浮ぶラスタカラー(黒、赤、<sup>ゴールド</sup>黄、緑)の大きな船にエマニュエルらが乗船し、アフリカに向かっている絵などが掲げられている。そしてメンバーの多くは日々彼の偉大さを語り、「神の使者」、「大預言者の一人」、「キリストの再来」などと聖書的伝統の中に位置づけるのである。

ただし彼らのような救済としてのアフリカ帰還という観念は、多く非現実的で時代錯誤的と評され、他のグループにもあまり例を見ないのが現状である。山を通しての救済は、基本的にはその地に滞り、「新しい人」として生活することを意味した。それは当人達の意識ではそうでなくとも、過去への不完全回帰、中途解放の道をも、納得のいくように、現在に至る歴史を再解釈し続けながら自己の存在を積極的に定位し、新天地で生き抜く源泉となった。それに対し海を通しての救済は、滞留拒否、過去の出自や地縁といった伝統への完全(実質的)回帰を意味し、それこそ真の完全な自由解放と解釈されたと考えられ

るのである。

第三のヘンリーによる偽造パスポート事件では、自称「破れを繕う者」(Repairer of the Breach) という旧約聖書イザヤ書58章12節からの引用句をもって「アフリカ改革教会」を設立し、その「牧師」に自ら任命したヘンリーのカリスマ性とその効果を発揮した。彼が何千枚と配布した青いカードを本当にアフリカ行きのパスポートと信じ、家、財産を皆売却した人は少なくなく、500人以上が参集したのである。この「パスポート」には特別メッセージが印刷されていたが、帰還が、神の選民にとって特別な意味があることを入念に印象づけていた。ところが彼が定めた日に若干の「奇蹟」は観察されたものの、エクソダスを可能ならしめることは何も起こらなかった。多くの信者は怒りと失望で、ヘンリーを詐欺師と見做して離れていった。一方カーゴ・カルト他、類似の預言とその失敗の事例にも見られるように、ある信者達はさらに信仰を深めることになった。カリスマ的指導者の配布したカードは、聖なる人物を通しての天的啓示として、帰還実現化プロセスにおける最も具体的な物的証拠の一つとして解釈されたのである。

ところでこの夢が破れてから、彼は「平和的」移住方法を断念し、より現実的で過激な方策を考えてゆく。一つは一大反逆事件となった、60年のキューバのカストロ首相への手紙及び武器弾薬発見に象徴される。キューバの介入による政府転覆計画と彼のグループのアフリカ帰還計画が明らかになったのである。これに引き続く一連の血腥い事件も加わり、大逆罪で彼は10年間の重労働の禁固刑を宣告される。

このような騒動と一般市民の悪感情や敵意の高揚、そしてそれらに対するラスタの側の憤慨や不公平感もつゆのり、ラスタの指導者の有志が西インド大学 (University College of the West Indies) に調査の依頼をする。著名なスタッフたちによる集中調査報告は、日刊グリーナー紙上でも公表された。この『大学報告書』は概して質の高いものであったが、最後に加えられた推薦簡条は、多くの一般市民の当惑と怒りさえ招いた。その最たるものは、政府がスポンサーとなつてのアフリカ移住の可能性を探るものであった。そして代表団派遣は実現したのである。団員の中には政府関係の要人に混じり、代表として数名のラスタの指導者も加えられた。その報告はラスタによる *Minority Report* と、公式の *Majority Report* として発表された。

ラスタファリ・ミッションのアフリカ諸国歴訪は、エチオピア訪問、特にセラシエ帝との謁見や公式レセプションも含み、政府絡みでアフリカ帰還を果たしたきわめて重要で象徴的な出来事であった。これで大規模な帰還は具体的段階に入ったかのようにだったが、その目的地、帰還方法、帰還後の彼地での生活保障等をめぐり、またしても大論争を巻き起こした。特に一般市民の税金を使用しての「非国民」ラスタの移住については、国民の権利と義務、過去の奴隷制や植民地主義全般に及ぶ対立する意見が沸騰した。結局ラスタの夢は再度挫折し、より実現可能な具体的方法の思案と空想が繰返されてゆく。個人や小規模単位の移住は散発的に見られても、集合的イデオロギーのレベルで考えると、不可能の

壁に突き当たらざるをえないのが現実だった。

しかし移住の実現化の試みを実践しているグループもある。1968年に宣教を開拓した「十二氏族 (Twelve Tribes of Israel)」がその好例である。それはヘンリーの教えを継承したわけではなく、彼らの組織内プログラムの一環として取り入れられてきた。メンバーから月々小額 (1979年～80年の調査当時で20ジャマイカ・セント、約28円) を集めてプールし、希望者を対象としたエチオピア行きの資金の一部に当てていた。

ところでヘンリーが次に打ち出したのは、アフリカ帰還というジャマイカ拒否の態度とは正反対の方向で、ジャマイカの「アフリカ」化と解釈できるものである。現実社会を別の角度から見直し、従来とは異なる積極的価値を見出すことにより、非現実的な帰還計画を断念していったのである。現代の知識人や若者を中心に強く見られる「精神的帰還」“spiritual repatriation”と呼ばれる一大潮流は、このような「アフリカ」化と同根と見てよい。

この流れの一つはコミュニティ形成と自立、発展化に、また一つは政治参加に表現された。ジャマイカの中にアフリカを見出し、アフリカの一部と再解釈することにより、社会的貢献路線が採られたのである。前者においては他に模範を示せる程の成功を収めた。しかし後者においては、総選挙で社会民主主義政党 (People's National Party) に協調し、大勢のメンバーを動員して応援はしたものの、見返りとしてのラスタに対する援助は目約束のみで無視されるなどの苦い経験をした。76年の総選挙以後は政治不信や批判を顕わにし、不参加、不干渉を一種イデオロギー化していった者も少なくない。そして彼らと類似した方向転換は、他グループでも、またグループに帰属しない独立派の個人の不定期な集会でも、また一個人の<sup>ライフ・ヒストリー</sup>生活史においても見られた。

ヘンリー、エマニュエル、ハウエルといったカリスマ的指導者とその忠実な追従者たちは、グループとして目指すところは違っても、情報伝達のネットワークは比較的整備され、指導者と中核グループが別個の動向を生むことがなかった点で共通している。ただしグループ周縁部のラスタは必ずしも一致した見解や行動を共有していたわけではなく、帰還問題もその例外ではない。これまで紹介したグループの中でも、そのグループの「正統的」ドグマとは異なった見解を秘かに示したインフォーマントは少なくなかった。それらの典型的モデルを抽出し類型化するのは困難だが、多くはいわゆる現実的合理主義型で、かつ状況依存型と言ってよい。

「必ずしもアフリカないしエチオピアへ帰らなくてもよい。何故なら我々はアフリカ人、エチオピア人なのだから。」あるいは「ジャマイカを地上の王国に近づければよい。」というヘンリー型のイデオロギーから、「何としてでも早くアフリカへと思いつつも、資金難等の理由による実現可能性の薄さに嘆息し続け、希望さえ失いがち……」という人々まで、実に多様をきわめる。また指導者等により共有されるべき中核的思想と個人的感情や見解の間を揺れ動くラスタも少なくなかった。

ところで「十二氏族」では、メンバーは誕生月に従って十二氏族のどれかに分類されるのだが、エチオピア移住希望者も、原則として各氏族からリクルートされ、欠員補充もその氏族内から行なわれるしくみになっている。調査当時、アジス・アベバから少し離れたシェシェマニ (Sheshemani) のある肥沃な土地が移住先の一つだったが、ここへ観光ビザのみで入国し、ついに逮捕・入獄され、強制送還された一人は数々の波乱万丈の経験談を少し語ってくれた。彼は三月生まれなので、ベニヤミン族に属し、ベンジー (Benzie) と呼ばれていた。ジャマイカで聞かされたエチオピア像と、現実のエチオピアの状況とのあまりのギャップにショックを受けたという。「何も知らないジャマイカ人は気の毒だ。しかし真実を仲間に語ったら、殺されるかもしれない……」と身の危険を感じての秘密の会談の後、二度と行きたくないと言を結んだ。彼は現金収入を得るため、幼な子たちを残してカナダのりんご園での農業契約労働者として移住しようとしていた。実際にエチオピアへ移住できたラスタはまだ少ない。しかも彼の例は特別である。しかしエチオピア帰還の実現もまた、ユートピアの挫折に繋がりうることを示す一例ではある。

先述のEICは、夢は夢として持ち続けるロマンチックな信仰遵守型だったが、帰還の実現をただ他律的に、受動的に待望し続けるのみではなく、政府や国連にまで何度も訴えてきた点は注目に値する。一方、「十二氏族」は現実的信仰遵守型で、自律的に、積極的に実行する試みを続けている。そして双方に、また他の多くのグループや諸個人にも共通するのが、この帰還の実現の最高責任者及び権限は、神「ジャー、ラスタファーライ」(Jah Rastafari)にある、と信じている点である。ジャーが本来的にその時空間も設定すると言われさえするのである。このような信仰に基づいた絶対的規準が崩れない限り、アフリカ／エチオピアのユートピア化が減退しても、ディアスポラ黒人のアイデンティティ模索の一環として、この夢の追求と実現化の試み、そして挫折と夢の再生は続くだろうと考えられる。

## おわりに

結局、この運動の帰還思想は、共通の夢を共に見るということから始まった。それは、その直接目標及びその実現化方法、手段等の差異は認識されながらも、社会的、文化的な改変の可能性があり、そして現にある程度実現されてきたという夢と自信を与えるものであった。と同時に、実行に伴う幾多の困難や帰還後の実生活上の諸問題——生活手段、土地の権利と義務、収支のバランス、国家や地方政体との関係等々——について、厳しい現実を教え続けてきた。

帰還の夢は継承されつつも、その実践へ移行する際に必ず浮上する具体的諸問題の現実の壁は厚い。それを乗り切るのに、夢は夢として、常に掲げられるモットーとして存在させ、その内容という聖域には立ち入らないという立場もある。そこでは観念レベルでの議

アフリカ帰還への待望  
—ジャマイカのラスタファリアンの夢と現実についてのスケッチ—

論の積み重ねは大いに奨励される。それにより運動内部もまた国民全体のレベルでも、国民文化のルーツやエスニシティ、ナショナル・アイデンティティや新しいカリビアン・アイデンティティの追求の炎は、断続的に再燃の徴候を示してきた。

帰還の実践化の具体的行動は、過去から「失敗」として歴史に足跡を残してきた。それも予言の失敗、カリスマ的権威の失墜、自称「選民」やグループの分裂や解体など、社会的のみならず聖の領域の混乱にもかかわるものであった。それだけ一連の混沌からの回復や秩序の再構成には、多大なエネルギーと時間が費やされた。ただ混沌から破滅へ歩むのではなく、「夢」に向かって再び立て直しをはかる、という積極的思考は失われていないと言える。その「夢」にかける情熱が完全に絶たれてしまうなら、それはこの帰還プログラムの重要性が、具体的にもまた象徴的にも失墜することを意味すると考えられるのである。

(付記) 本稿は1987年6月、日本ラテン・アメリカ学会第8回定期大会(於神戸市立外国語大学)において、「ラスタファリ運動における『アフリカ帰還』—その夢と現実」と題して行なった口頭発表をもとに、大幅に加筆修正したものであることをことわっておく。

引 用 文 献

- Barrett, Leonard E.  
1977 *The Rastafarians: the Dreadlocks of Jamaica*. Kingston: Sangster's /Heinemann
- 長嶋佳子  
1981 a *Rastafarian Music in Jamaica: Its Historical and Cultural Significance* (Unpublished M. A. Thesis). Univ. of Tsukuba (School of Area Studies)  
1981 b 「ラスタファリアンの讃美歌—ジャマイカ・ラスタファリ運動のナイヤビンギ音楽(1)」歴史人類学会『史境』3巻  
1982 a 「ジャマイカ島のラスタファリ運動の音楽社会学」東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所『象徴と世界観の比較研究』(責任者山口昌男教授)口頭発表  
1982 b 「ラスタファリアンの讃美歌—ジャマイカ・ラスタファリ運動のナイヤビンギ音楽(2)」『史境』4巻  
1982 c 「ラスタファリアンの讃美歌—ジャマイカ・ラスタファリ運動のナイヤビンギ音楽(3)」歴史人類学会『史境』5巻  
1984 *Rastafarian Music in Contemporary Jamaica: A study of Socioreligious Music of the Rastafarian Movement in Jamaica*. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所  
1985 a 「ラスタファリ運動の多様性について」太平洋学会(関西支部)(於奈良女子大学)口頭発表  
1985 b 「ラスタファリ運動の拡張と受容社会での展開—米領ヴァージン諸島セント・トマス島の事例」歴史人類学会第6回大会(於筑波大学)口頭発表  
1985 c 「カリブ海東部島嶼部のラスタファリズム—ジャマイカとの比較の視点より」日本人

- 類学会・日本民族学会第39回連合大会（於筑波大学）口頭発表
- 1986 a 「ラスタファリ運動の多様性について」『太平洋学会誌』29号
- 1986 b 「ラスタファリズム in ジャマイカ」『太平洋学会誌』29号（スライド解説）
- 1986 c 「アンギラ島のラスタファリアンたち」『太平洋学会誌』31号
- 1986 d 「ラスタファリ運動の拡張と受容社会での展開—米領ヴァージン諸島セント・トマス島の事例」『史境』12巻
- 1986 e 「セント・キッツ島のラスタファリアンたち」『太平洋学会誌』32号
- 1986 f 「保守的植民地社会と異端者ラスタファリアンたち—モンセラット島の事例」歴史人類学会第7回大会（於筑波大学）口頭発表
- 1986 g 「カリブ海地域のラスタファリ運動における『伝統』」日本人類学会・日本民族学会第40回連合大会（於九州大学）口頭発表
- 1987 a 「保守的植民地社会と異端者ラスタファリアンたち—モンセラット島の事例(1)」『史境』14巻
- 1987 b 「ラスタファリ運動における『アフリカ帰還』—その夢と現実」日本ラテン・アメリカ学会第8回定期大会（於神戸市立外国語大学）口頭発表
- 1987 c 「愛と力を求めて—モンセラット島のラスタファリアンたちの事例」『太平洋学会誌』35号
- 1987 d 「空のバイと大地の草—ラスタファリ運動の救済観をめぐって」日本宗教学会 第46回学術大会（於立教大学）口頭発表
- 1987 e 「ラスタファリズム—カリブ海のブラックパワー」『歴史読本』臨時増刊号特集「世界謎の宗教団体」
- 1987 f 「保守的植民地社会と異端者ラスタファリアンたち—モンセラット島の事例(2)」『史境』15巻
- 1987 g 「ラムとマリファナー—カリブ海黒人系社会の飲食文化複合と宗教伝統の一側面」日本人類学会・日本民族学会第41回連合大会（於京都大学）口頭発表
- 1987 h 「ラスタファリ運動の拡がり」UPU『GS トランス・アメリカ トランス・アトランティック』6巻

Simpson, George E.

- 1955 The Ras Tafari Movement in Jamaica: A Study of Race and Class Conflict. *Social Forces* 34

Smith, M. G., Roy Augier & Rex Nettleford

- 1960 *The Ras Tafari Movement in Kingston, Jamaica*. Kingston: Institute of Social and Economic Research (Univ. of the West Indies, Mona)

(1988年10月20日受理)